

<重友毅教授追悼>一九五六・七年の頃：重友教授のことなど

東, 喜望 / AZUMA, Yoshimochi

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

24

(開始ページ / Start Page)

107

(終了ページ / End Page)

110

(発行年 / Year)

1981-02-04

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019307>

〈重友 毅教授追悼〉

一九五六・七年の頃

——重友教授のことなど

東 喜 望

思ひ出づるままに、二、三のことを記しておきたいと思う。

あれは、昭和三十一年の夏のことであった。当時、文学部にはゼミナール委員会という学生の自治組織があったが、この委員会に、第三回全日本学生文学ゼミナール大会・日本文学部門近世部会での責任校を引受けて欲しい旨、準備校（立命館大）から要請があった。討議の結果、委員会ではこれを承認したが、報告担当校が仲々決まらず、結局、法政が報告をも引受けざるを得ない羽目になった。

ところが、どのゼミがこの任を負うかが問題となり、委員会で、近世関係のゼミにこの件を図った。当時は、授業の大半が演習形式で行なわれ、一般に授業科目名も「昭和文学ゼミ」というような呼び方をしていたが、ただ、Aゼミと称する必修ゼミとBゼミと称する選択ゼミとがあった。三、四年生は、全員Aゼミのいずれか一つに属していなければならぬというシステムである。

当然、委員会はAゼミに、如上の件を図った。当時は、近世関係

のAゼミといっても、二つほどしかなく、参加学生も少なく、私の属していた、近藤忠義先生の「諸国咄ゼミ」でも十数名の学生しか参加していなかった。余談になるが、若干このゼミについてふれておきたい。

先生は新館（正門右脇に在った）三階の教室に入ると、必ずドアを閉めさせた。「最近ゼミを廊下で盗聴する理事がいるそうだから、それにしても、おかみ（大学経営者）の頭上でゼミをやるのは面白いことですか」と冗談をいわれた。新館は各階一室で、一階は総長室、二階は理事・後援会室になっていたからである。小脇にかかえた紫の風呂敷包みから西鶴や近松の原本を出されて、回覧させながら、中世の分権的封建社会が崩壊し、近世に到って文化の中心が庶民（町人）に移ったこと、庶民の解放的精神の原質が「傾き」にあることなどを順々に説かれ、その後、学生の報告に移った。近世文学についての本格的な勉強をさせていただいた、このゼ

ミのことは生涯忘れることができない。

そんなAゼミ「諸国咄」であったが、全日本学生文学ゼミの報告担当に関しては消極的であった。「近松」を報告してはどうかという先生からの提案もあったが、四年生諸兄が卒論準備のため不可能だと反対し、他の近世関係Aゼミもこの任を負わなかった。委員会は、やむなくBゼミにこの件を凶ったのである。だが、Bゼミとして近世関係は一授業のみであった。

同年四月、初めて昼間部に出講して、このBゼミを担当していたのが重友毅教授（武蔵大教授・昭24年法大兼任。二部主任）である。私どもが同教授に初めて接したのもこの年であるが、教授は、秋成の雨月物語をとりあげ、ゼミと講義を併用して授業を進めていた。作品の解釈に主眼がおかれていたように思う。ゼミ委員会は、結局、全日本学生文学ゼミ・近世部会に、『雨月』を報告することに決定した。同年十月中旬のことである。だが、Bゼミという性格もあって、「雨月ゼミ」には、各時代の専攻学生が参加しており、何よりも期日が迫っていたので、「全日本」に向けての報告準備研究会をつくり、その指導・助言を重友教授にお願いするということになった。委員長永井時彦君（三年）から、教授への依頼の命を受けたのは、同級の花村国弘君と私である。卒直にいつてしんどいことだと思った。

その週末であったか、日曜日の午後、西武線豊島園から春日町へ向かう長い田舎道を、西日に照らされながら花村と私はとぼとぼ歩

いていた。勿論、急務とあって、教授の自宅を訪ねるためである。漸く尋ね当てて、案内を請うと早稲田の詰襟を着た学生が裏手から出てきた。ぼくらはびっくりして、咄嗟に「あのー、先生おいででしょうか」と言う。学生も反射的に「はい、先生おいでです」と答えた。書生かと思った。だがのちに聴けば、ご令息であった。

教授は応接台をはさんで座敷の中央部に毅然として座っておられたが、背後の床の間に吉田松陰の陶像の置かれていたのが印象に残る。ぼくらは事の次第を述べ、くだんのお願いを申し上げた。切り口上だったにちがいない。教授は射すくめるように、ぼくらを見た。とっさに私は駄目だと思った。だが教授は、「まあ、くずしたまえ。」と間をおいて承諾してくれ、今後の計画などを聞かれた。帰途、花村に「一貫目もやせた思いたぜ」とぼやくと、のっぽの彼は路傍の地藏様の頭をつるりと撫でて、「なーに、そうでもないさ。」組織者（？）花村は、このことを予測していたようであった。

以後、毎週二回ほど、ぼくらは報告準備のための研究会を持った。一回はゼミのあと、他一回は教授の二部の講義が始まる前の時間であった。几帳面な教授は、時計の針のように正確で、定刻にはびしっとおどましになる。屢々、学生が遅刻して、ひどく叱られたりもしたが、約一と月半、真剣な討論を重ね、漸く全日本学生文学ゼミに臨むことができた。報告者は全員三年で、四年の鈴木豊氏に議長をお願いした。

こうして、同年十二月十五、六の両日、同志社と立命館大学で開

かれた近世部会に臨んだのであったが、今にして思えば幾多の反省させられる点がある。当時は、吉本隆明・武井昭夫らの提起した、文学者の戦争責任問題について活発な論議が交わされていた頃で、創作部会（報告・早大）などもこの問題を取り上げ、法政から二年の諸君が討論に加わって成果をおさめていたようであるが、わが近世部会は作品論に終始し、それを越えた、文学が現実の提起している課題にどう応えていくかという問題にまで議論を発展させ得なかった。従って、「文学の本質とその歴史的課題」という大会テーマに直接応えることができなかったのは、今になお遺憾であり、その責任は偏えに私も報告者に帰すべきことであるが、ただ重友教授を助言者に迎えた、如上の研究会に於て、そういう問題意識が極度に抑えられたのも事実である。

教授は、所定の価値観や道徳律で作品を切ることをきらい、作品そのものにつくべきことを強く主張された。そのこと自体に異論はない。だが、作品にかかわる主体の問題が問われぬのだ。教授はよく、「その作家を評するということは、人間として、その作家を超えた次元にまで評者が成長していなければ不可能だ」といわれた。そして、近世に於ては、一に西鶴、二に芭蕉と近松、三に秋成だとも評された。その理由は人間をその深みに於いて追究した、すぐれた文学者だからだとする。かくて、源内や馬琴などをはじめとする戯作者一般は、下等なものとして退けられた。

教授に於ては、西鶴・芭蕉らは絶対的な存在として位置づけられ、

それらの古典を読むということは、読者がいわば「聖」^{ひじ}にぬかずくことであった。だから聖のご託宣が理解できぬ学生は劣等生ということになる。劣等生の「柔軟自在な」発想など一撃の下に否定される。あの全日本文学ゼミの準備研究会に於ても、不況のどん底にあえぐ当時の厳しい状況下に在って、そんな現実にはち向かうためにも、作品を主体的に読みなおしてゆく必要があったのだ。

教授は長州萩のご出身で、軍人の家に生立たれたと聴く。厳格な人柄はここに由来するのであろうか。一高・東大では片岡良一教授と同期であったという。機会あって「文芸復興」(昭12)に寄せた教授の「創刊の辞」を読んだことがあったが、格調高い文体で、歴史的社会的研究の必要を主張しておられた。生涯、文学をその作家の芸術道において追究された学者であらう。学生にとっては、近寄りがたい存在ではあったが、作品の形象を徹底考究される教授の読みの深さに、私たちは教えられた。今は亡き教授の在世中に、近世の文芸が根源的に含み持つ転合や悪戯^{わづ}の精神をどう評価するかという問題を問うておきたかったと思う。世を横ざまに生きた秋成とて、やはりわやくに徹した「をこ」の人だと思えてならないからである。やはりぼくたちは非力だったのかも知れぬ。

翌三十二年、私たちは教育実習等に忙しく追われながら卒論に取り組まねばならなかった。資料の一つとして『秋成遺文』を求めたが、神田や本郷の古本屋を捜し廻ってもどうにも入手できなかった

た。思い余って、ある日、六角校舎の階段を教場へ向かう重友教授に、借用を申し出た。「そんなことは指導教授に相談したまえ」と一蹴された。その後、近藤先生にお願いしたが、先生は快諾くださって、翌週早速ご持参くださった。卒論を仕上げ提出した年の一月下旬、貴重なこのご本をお返すために、初めて先生のお宅を訪ねた。「白蛇伝と蛇性の姪」を執筆されていた頃で、中国の話本や白話の原本が書棚一ぱいに並んでいたのが忘れがたい。帰途、杉小立の林間をゆきながらなぜか涙がこぼれた。

それから二ヶ月の過ぎた三月二十八日、殆どが就職も決まらぬまま、ぼくらは掃き出されるように校門を出た。冷い雪の降り続く午後である。(その夜、小原元先生を囲み、浅草・菊水で開かれた卒業コンパの席上、日向野克巳君の提案で、ぼくらは三三会へ33年3月卒の意なる同窓会を結成したが、未だ再開しないままである。)